

SLAVIC
RESEARCH
CENTER NEWS

No.123 November 2010



グローバルCOE

◆ GCOE・SRC 2010年度冬期国際シンポジウム ◆
地域を融かす境界研究：ユーラシアと「愉快」な仲間たち

12月4日、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の主催により、世界の拠点で境界研究（ボーダースタディーズ）をリードするパネリストたちを招いて、国境・境界問題について議論します。日英同時通訳を入れてメディアや一般の方にも公開されますので、お気軽にお越しください。また3日の午後からは、公募で採択された若手研究者によるワークショップが開催されます（英語のみ）。[岩下]

地域を融かす境界研究：ユーラシアと「愉快」な仲間たち

De-*Area*nization of the Border Studies: "Greater Eurasia" and the Neighbors

主催：グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：ユーラシアと世界」

共催：スラブ研究センター／新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」

2010年12月4日

場所：北海道大学スラブ研究センター大会議室 時間：9:00～18:00

9:00～ オープニング・アドレス

9:30～11:30 セッション1：グローバル・コミュニティの形成にむけて：中東・欧州・北米の経験

デイビッド・ニューマン（ベン・グリオン大、イスラエル）

マーティン・ヴァン・ダー・ベルド（ラドボード大、オランダ）

マニュエル・チャベス（ミシガン州立大、米国）

11:30～13:00 ランチョン（特別講演）：前近代日本の境界

ブルース・パートン（桜美林大）

13:00～14:00 ミュージアム・ツアー（GCOE第3期展示「先住民と境界」北大総合博物館2F）

14:00～15:45 セッション2：国際社会学との遭遇：難民・移民・マイノリティ

樽本英樹（北海道大）

ダニエル・ジョリ（ウォーリック大、英国）

ムザンメル・クラシ（サルフォード大、英国）

16:15 ~ 18:00 セッション3：政治地理学の視座：バルカン・中央アジア・沖縄
アントン・ゴースー（プリモルスカ大、スロベニア）
ルエル・ハンクス（オクラホマ州立大、米国）
山崎孝史（大阪市立大）

新学術領域研究

◆ 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4回国際シンポジウム ◆

新学術領域研究第4回国際シンポジウムは、2010年12月11日（土）～12日（日）の日程で、大阪梅田のブリーゼ・プラザで開催されます。今回は第5班「国家の輪郭と越境」が組織します。このシンポジウムでは、地域大国内部のマイノリティ、国外のディアスポラ、周辺国、これらの場を往来する人間のモビリティといった、「周縁」的存在によって地域大国像を照射することを目指します。[山根・長縄]

プログラムの概要

帰還と拡散：地域大国における人間の移動と越境

Regional Routes, Regional Roots? Cross-Border Patterns of Human Mobility in Eurasia

主催：新学術領域研究 第5班「国家の輪郭と越境」

共催：北海道大学スラブ研究センター、大阪大学世界言語研究センター

後援：地域研究コンソーシアム

日時：12月11日（土）～12日（日）

場所：ブリーゼ・プラザ（大阪西梅田「ブリーゼ・タワー」内）

使用言語：英語

12月11日（土）

会場：ブリーゼ・プラザ 803-804号室（8階）

10:00 ~ 10:15 開会式

10:15 ~ 12:15 セッション1 聖地巡礼：信仰と消費

司会：古谷大輔（大阪大）

報告：高山陽子（亜細亜大）「紅い土産物：中国におけるプロパガンダ・アートの商品化」

アイリーン・ケイン（コネチカットカレッジ、米国）「ロシアからのメッカ巡礼ルートにみる経由地」

小磯千尋（大阪大）「西インドにおけるヒンドゥー教徒の二つの巡礼路」

討論者：守川知子（北海道大）

13:30 ~ 15:30 セッション2 故郷を遠くで想う：ディアスポラへの招待

司会：岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）

報告：グルナラ・メンディククロヴァ（世界カザフ協会ディアスポラ研究センター、カザフスタン）「カザフスタン共和国におけるカザフ・ディアスポラをめぐる政治」

スーラト・ホラチャイクル（チュラロンコーン大、タイ）「インド系タイ人とそのインドとの関係」

劉宏（南洋理工大、シンガポール）「第二の故郷？：中国国家と新たなディアスポラの誕生」

討論者：赤尾光春（大阪大）

15:45 ~ 17:45 セッション3 モバイル・ビジネスマン：商人ディアスポラとネットワーク

司会：吉村貴之（東京外国語大）

報告：アルツヴィ・バフチニアン（アルメニア科学アカデミー歴史学研究所、アルメニア）
「国際貿易にみるアルメニア商人の活躍」

スティーヴン・デール（オハイオ州立大、米国）「インド人商業ディアスポラ：その広がり
と生業」

久末亮一（政策研究大学院大）「シンガポールにおける華人系銀行の形成：20世紀前半に
おける背景と展開」

討論者：大石高志（神戸市外国語大）

12月12日（日）

会場：ブリーゼ・プラザ小ホール（7階）

10:00 ~ 12:00 スペシャルセッション 知識の拡散：エリート養成と国家の輪郭形成

司会：田畑伸一郎（北海道大）

報告：王智新（聖トマス大）「科挙から留学：近代国家への目覚め」

ジョーティ R. ダンデーカル（バーラティ・ヴィディアーपीート大、インド）「教育大国とし
てのインド：プーナ大学の留学生科設立の経緯とその後」

ラフィク・ムハメトシン（ロシア・イスラーム大、ロシア）「ロシアにおけるイスラーム大
学教育の発展：課題と展望」

討論者：山根聡（大阪大）

13:30 ~ 15:30 セッション4 周縁からの問いかけ

司会：山口昭彦（聖心女子大）

報告：マイケル・レイノルズ（プリンストン大、米国）「帝国の終焉：20世紀初期におけ
るクルド人の位置付け」

登利谷正人（上智大）「地域大国の狭間で：緩衝国としてのアフガニスタン（19世紀後半）」

ウラディン E. ブラグ（ケンブリッジ大、英国）「マイノリティの視角：初期社会主義中国
における政治観光と民族の語り」

討論者：王柯（神戸大）

15:45 ~ 17:45 セッション5 移動がもたらすもの：移住と定住

司会：松里公孝（北海道大）

報告：ジェシカ・アリーナ=ピサノ&アンドレ・シモニ（オタワ大、カナダ）「国境地帯を
理論化する：比較対象としての黒河-ブラゴヴェシensk

中谷純江（鹿児島大）「故郷への投資：インド商業集団、マールワリーの経済活動」

崔延虎（新疆師範大、中国）「遊牧と定住の間：新疆遊牧社会における社会文化的な変遷に
関する事例研究」

討論者：ジェフ・サハデオ（カールトン大、カナダ）

17:45 ~ 閉会式

◆ 新学術領域研究の中間評価で A 評価 ◆

3年目を迎えた新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」は、文科省の定めに従い、この8～9月に専門家による中間評価を受けました。このほど、A評価（研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる）を受けたという通知がありました。

中間評価は、「評価要綱」に則り、「科学研究費補助金における評価に関する委員会」のな

かの「人文・社会系委員会」によっておこなわれました。ヒアリングは、9月13日に文科省でおこなわれました。「中間評価に係る意見」は次のとおりでした。[田畑]

本研究領域は、ロシア、中国、インドを現代の世界秩序に挑戦する「地域大国」と位置づけ、これらの国々の特殊性・固有性を探究するとともに、共通性を抽出し、さらにはそれを通じて世界システムの理解の深化を目指すものである。

その調査方法の一環として、地域研究者が専門外の地域に相互乗り入れをおこなっていることは注目に値する。これらの調査を通じて、学会誌レベルの論文も精力的に生産され、「帝国とその崩壊プロセスの比較」「地域経済統合」「内政比較」などの大きなテーマをめぐって、着実に研究成果が挙がっている。国内外の学会でセッションやラウンドテーブルを設置するなど、研究成果の公表についての積極的な姿勢も評価できる。公募研究も研究領域の特色を反映しており、計画研究と公募研究の連携もよくできていることも高く評価できる。

今後の研究を通じて、「世界システム」「文明圏」「帝国」などの大概念についてのさらなる検討と、個別の研究課題についての研究成果を統合する、より大きな議論や理論的枠組みの提示が期待される。なお、この研究領域でおこなわれている、地域研究者の相互乗り入れについては、その方法を通じて具体的にどのような新しい発見がおこなわれるのかということ、より方法的・体系的に明示してもらいたいという意見も出され、地域研究の方法論の再検討のための貢献も期待される。

また、大きな理論的枠組みの提示という課題に関しては、各研究グループを越えての大きな議論の場があまりつくられていないという意見があり、そのような議論の場がより多く設けられ、より大胆な理論化がなされることが期待される。

◆ 外国人研究員 ◆

新学術領域研究第1班の外国人研究員として、インド防衛問題研究所（IDSA）のシャムシャド・ハーン氏の採用が決まりました。日本研究および国際関係論を専門とされており、新学術領域のプロジェクトではIndo-Japan Strategic Relations: India's Search for Reciprocityというテーマで研究活動をおこないます。ハーン氏は2010年12月から2011年3月までセンターに滞在する予定です。

なお、第2班の外国人研究員として採用されていた楊成氏は2010年9月に帰国し、代わってITPのプロジェクトに参加するため雇用が中断していた任哲氏が第2班のプロジェクト研究員として復帰しました。[越野]

グローバルCOE

◆ GCOE 編集『境界研究』刊行 ◆

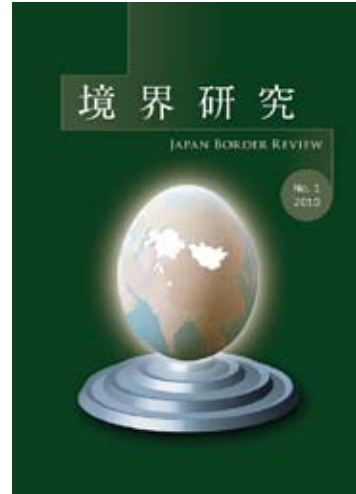
北大GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」が編集した学術誌「境界研究」が発行されました。今年5月に共催したアジア政経学会東日本大会の共通論題「中国と『辺疆』：隣国との間」で報告されたペーパーを中心に、これに投稿論文や書評を加えた盛りだくさんな内容です。はからずも特集「中国をめぐる境界」に集められた4論文は、尖閣問題や漁船衝突事故等で、昨今注目される中国を考えるうえで格好の材料となるものです。GCOEプロジェクトは社会還元を目的の一つに掲げており、真価を問われているところでもあります。本特集を読むことで、中国がなぜあのような行動をとるのか、その理屈や考え方を理解するてがかりになれば幸いです。なお、学術誌『境界研究』は第二号刊行に向け論文を広く募集しております。

投稿規定 <http://borderstudies.jp/file/toko.pdf>
執筆要綱 <http://borderstudies.jp/file/shippitsu.pdf>

以下のような書評をいただきました。[藤森]

ボーダースタディーズなる耳新しい研究領域。国際政治は旧来の国家間関係からトランスナショナルな関係に変化してきた、と言われつづけ四半世紀。動きが加速するグローバルな21世紀だからこそ、国境という古典的な境界への国民的執着が始まっている。魅力的なフォーラムの場が誕生したことを喜びたい。(竹中千春・立教大学教授)

ボーダー・リテラシー（境界を理解すること）の欠如。「固有の領土」「不法占拠」など激しいスローガンが飛び交う昨今。だが、言葉の中身を説明できる人は少ない。国境とは何か、複数の学界にまたがる専門家群が越境しつつ、リテラシーの涵養を促す。(木村崇・京都大学名誉教授)



研究の最前線

◆ アムール・オホーツクコンソーシアムの国際ワークショップ開かれる ◆

北海道大学のサステナビリティ・ウィークに合わせて、「2011年アムール・オホーツクコンソーシアム第2回会合に向けた国際ワークショップ」が11月1～2日にスラブ研究センターで開催されました。このアムール・オホーツクコンソーシアムは、アムール川とオホーツク海を1つのエコシステムと捉えて、その環境保全と持続可能な利用を研究するための多国間研究者ネットワークであり、今年のワークショップは、来年開か



ワークショップのようす

れる第2回会合の準備のための会議と位置付けられました。主催は、北大の低温科学研究所、スラブ研究センター、北見工業大学未利用エネルギー研究センター、共催は、人間文化研究機構総合地球環境学研究所、北大 GCOE プログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」、国土交通省北海道開発局でした。

1日目の一般向けの公開講演では、次の報告がなされました。

ピョートル・Y.・バクラノフ（ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所）「ロシア極東地域の持続可能な経済発展と環境保全」

筈志剛（中国黒竜江省社会科学院北東アジア研究所）「中国東北部における環境保全と中日経済協力」

D. オウンバートル& D. ジュゲデル (モンゴル水文気象研究所)「オノン川・ヘルレン川の水文環境」

林直樹 (外務省欧州局ロシア課)「日露隣接地域生態系保全協力プログラムについて」

吉田進 (環日本海経済研究所名誉理事長)「極東地域の持続可能な発展と越境環境保全」

2日目は、専門家会議と位置付けられ、まず、次の2つの報告がなされました。

白岩孝行 (低温科学研究所)「アムール川・オホーツク海生態システム保全のためになぜ多国籍学術ネットワークが必要なのか？」

アンパイ・ハラクナラック (国連環境プログラム地球環境ファシリティ・アジア太平洋オフィス)「UNEP/GEF アムール川／黒龍江流域統合管理プロジェクト」

この後、このコンソーシアムの今後の活動や来年の第2回会合のテーマなどについて、活発な議論がおこなわれました。今年の会議では、モンゴルの研究者が初めて参加したことが特筆すべきことでした。これまで、このコンソーシアムの幹事は、日本、ロシア、中国から、それぞれ江淵直人氏 (低温科学研究所)、ピョートル・バクラノフ氏、笹志剛氏の3人でしたが、モンゴルの幹事として、オウンバートル氏が選ばれました。来年の会合は、11月4～6日に札幌で開催される方向で調整が進められます。[田畑]

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。

10月27日：松里公孝「正教世界の一部としてのロシア正教会」

センター外コメンテータ：塚田力 (北海道大学文学研究科)

松里研究員は研究の一つの柱として「宗教」を掲げていますが、センターでは長縄研究員がロシアのイスラムを研究テーマにしています。世界的に見て宗教は重要な研究テーマですが、スラブ・ユーラシア研究でも宗教への関心が近年高まっています。長縄研究員も松里研究員もその先頭を走っている集団の中にいます。松里研究員の今回の論文は、ロシア正教会について一般に流布している観念「皇帝教皇主義」や「第三のローマ」説を批判的に吟味し、これらがロシア正教会の教義としては根拠がないことを示しました。論文は更に進んで、民族教会説に対しても、実体としては世俗国家やその国境と正教会の管轄地域が一致しないことを示しました。

セミナーでは教義上の問題と実践的な正教会の役割のずれ、あるいは正教会の民族を超えた帝国性がどこまで主張できるのかなどについて活発な議論がおこなわれました。今回の論文はこれまで松里研究員が手掛けてきた欧文での雑誌論文スタイルで書かれたものではなく、今後公刊が予定される日本語での啓蒙書の分担執筆分です。スラブ・ユーラシア地域の宗教について新しい視点から描かれた概説書が店頭に並ぶのを期待しましょう。[家田]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース122号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

9月15日 藤本尊正 (大阪大)「19世紀後半から20世紀初期における、極東ロシア・ウラジオストクの疫病と衛生行政」(鈴川・中村基金奨励研究員報告会)

9月27日 研究会「多言語社会ヴォイヴォディナ：交錯する境界・文化・アイデンティティ1」

L. ボボヴィチ (センター)“Ruthenians versus Ukrainians in Serbia and How They Are Interwoven”; M. ドウドク (ノービサード大、セルビア)“Internal and External Borders of the Slovak Language: Slovak as a National Language and Language of Diaspora”; J. ドウト

- コヴァ (演劇・映画研究所、スロヴァキア) “The Border: A Slovak Film and the Problem of Constructing of Collective Identity” (GCOE・SRC セミナー)
- 9月30日 小松久恵 (センター) 「Home, sweet home? 現代英国エイジアン・カルチャーと移民文学」 (新学術セミナー)
- 10月7日 V. フリードマン (シカゴ大、米国) “Language Borders Within the Speaker - Codeswitching Practices and Bi- and Multi-lingualism in the Balkans” (GCOE・SRC 特別セミナー)
- 10月9-10日 国際シンポジウム「ロシアと日本の研究者の目からみる日露戦争サハリン戦」 A. コスタノフ (サハリン州文書管理局、ロシア) 「日露戦争サハリン戦に関する文書館資料状況」; M. ヴィソコフ (センター) 「ロシアにおける日露戦争サハリン戦研究」; G. シャルクス (サハリン大、ロシア) 「日露戦争とサハリン鉱業」; M. イシチェンコ (同) 「日露戦争とサハリン住民」; N. ポタポヴァ (同) 「日露戦争と教会の役割」
- 10月12日 V. フリードマン (シカゴ大、米国) “Borders of Identity: Creating Balkan Selves” (特別講義)
- 10月21日 任哲 (センター) 「中国の基層政府: 『安定』と『発展』の間で」 (GCOE・SRC セミナー)
- 11月9日 P. コホウト (チェンバロ奏者、チェコ) 「中央ヨーロッパにおけるバロック音楽の西と東」 (GCOE 博物館セミナー)
- 11月22日 池炫周直美 (センター) 「民主主義する韓国: 理想と実践の狭間で」 (GCOE-SRC 研究員セミナー)

ハンガリー赤泥流出事故と日本の支援

家田 修 (センター)

今年メキシコ湾の海底油田事故に続き、10月初めに東欧のハンガリーで赤泥と呼ばれるアルミニウム産業廃棄物の大規模な流出事故が発生しました。前者はメディアで継続的に取り上げられましたが、後者は極めて扱いが小さく、しかも第一報の後、全体として報道が途絶え、何が起こったのか、全く分からずじまいの状況が続いています。

赤泥は私たちが日頃手にするアルミ缶などの原料であるアルミナの製造過程で生じ、アルミ一缶につきその二倍もの赤泥が出ます。

再利用が難しく、世界全体で年間1億トンもが投棄されています。日本は海洋投棄していましたが、近年、環境に配慮してアルミナ生産をやめ、海外に生産拠点を移しています。その意味で日本は世界の赤泥に責任もあり、他人事では済まされないといえます。

今回の事故では、欧州10カ国を貫流するドナウ川に汚染物質が流出するのは、食い止められましたが、広範な自然破壊が生じ、死者も出ました。現在も百万トンの赤泥が1000ヘクタールの農地に流出したまま、乾燥して飛沫化し、大気汚染を引き起こしています。現地政府は健康被害防止のためマスク使用を促していますが、4万人の地域住民にマスクを毎日一個、数ヶ月にわたり確保することは、費用と品質、とりわけ数量面で不可能であり、マスク文化をもつ日本に支援を求める声が現地から上がりました。

これに対し、事故現場の県と姉妹関係にある岐阜県のハンガリー友好協会がいち早く支援の手を上げ、現地の新聞も「日本が支援」と報じ、被災者を勇気づけています。更に事故を知っ



赤泥津波が破壊した塀や樹木 (デヴェチェル市)



2メートルに達した赤泥津波が残した痕跡
(デヴェチエル市)

なく、日本から送るしか手がありません。

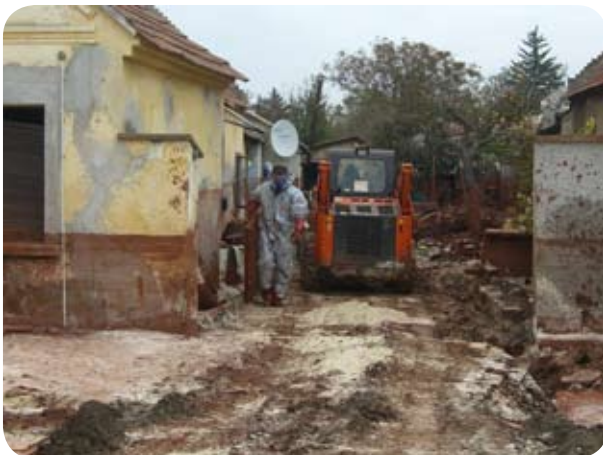
ハンガリーはEUに加盟したとはいえ、ギリシャと同様、経済不振と財政赤字で苦しんでいます。また事故調査にきたEU調査団は、赤泥に関する極めて「甘い」EU環境基準に影響されたのか、「大気汚染は心配ない」と言っています。他方、赤泥について独自の厳しい環境基準をもつハンガリーの専門家は、繰り返し人体への影響を警告しています。日本からの支援にハンガリーの人々が勇気づけ



住民と赤泥除去作業隊
(最大の被災地デヴェチエル市街)

られているのには、こうした背景もあります。

マスク支援は乾燥する冬を前に、時間との戦いです。この支援に御関心のある方は家田までご連絡下さい。



石膏（白い粉）による赤泥中和と瓦礫撤去作業
(デヴェチエル市)

対馬のまずいコーヒー：国境フォーラム雑感

藤森信吉（センター）

グローバル化が進展する近年、「社会ダーウィニズム」が随所で聞かれるようになってきた。しかし、その意味するところは「強者」ではなくて「より適応した者」が生き残ることにある。例えば、旧ソ連・東欧の地域研究者は就職が極めて厳しい状況にあるが、これは、研究水準が低下したからではなく、スラブ地域の研究が教育機関の要請に適応しなくなっているからなのである。必要なのは「良い研究」ではなく、「求められている研究」である。「今の研究を



厳原の韓国人観光客

地道に進めれば君たちも就職できるよ」などと言いつつも優雅な年金生活を送るであろう人達の前世はアノマロカリスか、ダーウィン・フィンチだったに違いない。

それはさておき、日本の境界地域もグローバル化に晒されている。三位一体の改革の波をもろにかぶった自治体のいくつかは、観光に頼ったり、あるいは海士町のように観光に依存せず地場産業の育成に傾注したりしている。

「第4回国境フォーラム(2010.11.12-13)」開催地の対馬は、韓国からの観光に地域活性化の芽を見出している境界地域である。日韓の国境地帯に位置しているとはいえ、対馬は距離的には福岡より釜山に近く、多くの韓国人観光客がフェリーで訪れる。韓国人観光客の増加とともに、彼らのマナーや韓国資本による不動産買収等が報じられ、「韓国人による対馬占領」とか「国境の安全保障の危機」とかセンセーショナルに叫ばれる。しかし、実際に厳原に行くと、韓国人観光客はのんびりと観光しており、逆に一日本人として、対馬を訪れて経済に貢献してくれる彼らに感謝したくなったりする。率直に言って、本州や北海道に住む我々は対馬観光に食指が動かない。同じ予算・時間があれば釜山で飲み食いする方が楽しいに違いない。しかし、対馬は、朝鮮半島から近いという立地、そして韓国人が好む釣りやトラッキングを生かして「韓国人にとって最初の海外旅行地」の地位を確保しつつある。

「観光」は、大きな地場産業を持たない自治体のマジック・ワードでもある。しかし、実際のところ、小さな自治体にとって「観光立国」は簡単なものではない。観光資源だけでなくソフト面の充実が不可欠であるが、境界地域にとってこれが難問である。近年、日本では中国人・韓国人観光客が増加しており、主要都市では、彼らに「適応した」観光業が成立している。札幌にも卒業した中国留学生をスタッフに揃える中国人観光客専用ホテルが誕生している。大都市圏では、外国語ができるスタッフを揃えるのは容易であるし、競争が激しいから状況の変化に直ぐに適応していく。しかし、それ以外の地では変化が少ない。前回の国境フォーラム開催地であった根室も、ホテルは旧態然としたものがっかりするものだった。体験上、これらのホテルはネットがなく、クレジットカードが使えず、朝食のコーヒーがとてもまずい。これを「観光客の価値観の押し付け」とか「上から目線」として批判するのはたやすい。だが、

観光客は各地域の特色とか複雑な地元利益には無頓着で自分の価値観が実現することを当然と思う。

対馬に限って言えば、市が韓国人スタッフを雇って韓国語による観光パンフレットや広報につとめたり、釜山に観光事務所を構えたりと大変な努力をしている。しかし、受け入れ主体であるホテルや小売店の対応は十分とはいえない。スタッフが韓国語をできないのはまだしも、カード決済ができなかったり（これは小売りにとって明らかに機会の喪失である）、インターネットがなかったり、さらには韓国人に対して朝食に生卵を出したり、と韓国人観光客がお金を落とす環境が全く整っていない。ネットに関して言えば、CATV網が対馬全島に張り巡らされているのだから、インターネット環境は僅かな追加投資で実現すると思うのだが、なかなか腰が重いようだ。



みうだペンション

しボットが各部屋に置かれ、カードもネットも可能である。そのかいあって、客の8割は韓国人であり、夏場は満室が続くという。特に韓国からはサイクリング客が目立つという。自転車を積んで釜山からフェリーで厳原に入港し、9時間ほどサイクリングしてたどり着いた上対馬で温泉に浸かった後にペンションでバーベキューに興じ、翌日、近くの比田勝港から釜山に戻る、というプランである。釣り客を除けば、韓国人の対馬観光はリピーターが少ないと言われているが、このサイクリングにはリピーターが多いとのことである。

長々と観光客としての体験を書いたが、筆者は「国境フォーラム」で境界地域を訪れるたびに、自らの立つ位置の難しさを痛感する。無意識のうちに観光客目線になってしまうのだ。日本の境界自治体の実務者と境界問題の学術専門家を集めて行われる「国境フォーラム」も、そして北大グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」も、首都の政策決定過程に届かない境界自治体の立場にたって彼らの声を集約するとともに、学界を交えることで各自治体が世界標準の共通言語で考え、語る場を提供することを目的としている。しかし、これら自治体に対し、我々は観光客の価値観を投影してしまう。そもそも大都市札幌も旧帝北大も、日本の中では中心に近い。もしかしたら、観光客目線に加えて、無意識のうちに 宣教師や植民地総督のような上から目線になっているのかもしれない。だが、その一方で、中央資本たるモスバーガー長崎対馬店で飲んだプレミアム・ブレンドコーヒー（220円）はどの対馬のホテルのコーヒーよりもおいしかったように感じられた。筆者の味覚まで、中央の価値観に染まってしまったのだろうか。

とはいえ、対馬でも主たる観光客のニーズに「適用」した宿泊施設もある。例えば、今回巡検でお世話になった上対馬にある「みうだペンション」である。釜山訛りの韓国語を駆使する経営者は、韓国人観光客をターゲットに、バーベキューができ、オンドルを備える宿泊設備を建設した。道をはさんで向こうには市が経営する温泉施設がある。周囲が自然に囲まれているため、問題になる韓国人観光客の大騒ぎも、ここでは無縁である。辛ラーメン用と思しき湯沸

学 界 短 信

◆ 日本国際政治学会 2010 年度研究大会への貢献 ◆



好評！ スーパースターセッション

上げます。とくに今回は、普段のイベントで鍛え抜かれた GCOE 研究員やセンター事務スタッフの力量の高さが光りました。またセンターがサポートしたボーゲルさんとマストニーさんの東西冷戦パネルや新学術関連の企画部会は存在感を示していました。北海道大学出版会からも学会に初出展。懇親会ではみなさんにサッポロクラシックを堪能していただきました。[岩下]

センターは、今年度から共同利用・共同研究拠点として認定されたことに伴い、研究コミュニティへの貢献に力を注いでいます。その一環として、2010 年 5 月にアジア政経学会東日本大会の札幌開催を引き受けましたが、このたび 10 月 29 日から 31 日まで札幌コンベンションセンターで開かれた国際政治学会の札幌大会の組織も引き受けました。おかげさまで 600 人を越える参加者が集い、盛況のうち無事に終了しました。御協力いただいた関係者の方々にお礼申し



北大出版会も活躍！

◆ 学会カレンダー ◆

2010 年 12 月 4 日 GCOE・SRC 2010 年度冬期国際シンポジウム（記事参照）

12 月 11-12 日 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 4 回国際シンポジウム「帰と拡散：地域大国における人間の移動と越境」於大阪大学（記事参照）

2011 年 7 月 7-9 日 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第 5 回国際シンポジウム 於北海道大学

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 内戦期、および亡命ロシア人の刊行雑誌 ◆

20世紀の在外ロシア人が出版した雑誌、および内戦期の雑誌を、断片的ながらいくつか入手しましたので紹介します。

Воля России : журнал политики и культуры. Прага, 1920-1932.

Литературная энциклопедия русского зарубежья 1918-1940. Периодика и литературные центры. (М. : РОССПЭН, 2000)によれば、1920年創刊、当初はエスエル系の新聞だったが、1922年9月以降は、上記の副題を持つ月刊誌となったとのこと。今回センターが入手したのは、その1929年3号と1932年1-3合併号の2冊です。

なお、この雑誌は、その一部が北大附属図書館および東京大学社会科学研究所、同文学部スラヴ文学研究室にも断片的に所蔵されております。

Литературные записки : литературно-общественный и критико-библиографический журнал. Петербург, 1922.

1号(1922年5月25日)、2号(同年6月23日)、3号(同年8月1日)の3冊を入手しました。表紙には、「文学者の家」の表示があり、その機関誌と見られます。なお、Периодическая печать СССР 1917-1949 : библиографический указатель. (М. : Изд-во Всесоюзной кн. палаты, 1958)の第8巻には、やはりこの3号しか記載がなく、以上が刊行された全ての号かと思われます。また、国内には、他に所蔵館はない模様です。

Рубеж : еженедельный литературно-художественный журнал. Харбин, 1927-1945.

192, 193号(1931年9月)、810, 812, 813, 817, 821, 827, 828, 840号(1944年2~12月)、843, 850号(1945年1~3月)の各号を入手しました。絵や写真入りの一般向け雑誌ですが、1931年の分と1944年以後の分を比べると、後者は明らかに紙質が低下し、内容的にも戦時色が強まることが窺えます。国内では、関西大学がまとまった分量を所蔵していますが、今回の入手分とはあまり重複しません。

Русское знамя : орган Патриотической и монархической мысли. Шанхай, 1933-?

50号(1938年2月)、51号(同3月)、52号(同4月)の3冊を入手しました。国内での他の所蔵館は、確認できていません。

Церковная правда : богословский и церковно-общественный заграничный журнал. Берлин, 1913-1914?

本誌は隔週刊ですが、その創刊号から翌年7月初めまでの号を入手しました。ただし、いくつか欠号があります。

ロシア正教会が在外正教徒向けに発刊した雑誌で、途中からはドイツ語やポーランド語の標題が付され、ロシアへの輸入は無税である旨が表示されるようになります。しかし、創刊翌年には第一次大戦が始まり、ドイツは敵国となったため、刊行を継続するのは困難となったのではないのでしょうか。

なお、国内での他の所蔵は未確認です。米国では、ハーヴァード大学がこれを所蔵しますが、最初の年の分だけの模様です。[兎内]

◆ 文学研究科旧露文研究室所蔵マイクロ資料の移動 ◆

2008年度、文学研究科の建物が耐震改修工事の対象となった時、旧露文研究室にあったマイクロ・フィルム、フィッシュ類をお預かりすることになり、センター図書室で提供できるよう、必要な手続や整理を進めてきましたが、今年度の前半までにはほぼ完了しましたので、お知らせします。

主な内容ですが、マイクロフィッシュは、IDCが製作した、シンボリズムやアクメイズムなど、20世紀初頭に出版された文学作品が中心ですが、他に『モスクワ電信』（1825-1834年）などを含みます。また、マイクロフィルムには、『モスクワ報知』の1830年から1917年までの分が含まれています。[宛内]

◆ 工藤幸雄氏旧蔵資料のその後 ◆

センターニュース118号(2009年8月)において、ポーランド文学者故工藤幸雄氏(1925-2008)旧蔵書の受入についてお知らせしましたが、その図書の部分、1513冊について、この10月に登録・整理作業が開始されましたので、お知らせします。[宛内]

ウェブサイト情報

2010年7～9月までの3ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く）の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
7月	356,997 (11,516)	12,515 (404)	2,239 (72)	121,309 (34%)	188,643 (53%)	47,045 (13%)
8月	332,638 (10,730)	11,769 (380)	2,062 (67)	101,624 (31%)	191,089 (57%)	39,925 (12%)
9月	365,454 (12,602)	12,170 (420)	2,036 (70)	109,774 (30%)	200,911 (55%)	54,769 (15%)

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第58号への投稿は8月末で締め切られました。16件の応募があり、2011年春の発行を目指して現在審査をおこなっています。[長縄]

◆ ACTA SLAVICA IAPONICA の刊行 ◆

第 29 号は年内に刊行される予定です。内容は以下の通り。

ARTICLES

- Сергей Абашин «Идеальный колхоз» в советской Средней Азии: история неудачи или успеха?
Michael Finke Of Interpretation and Stolen Kisses: From Poetics to Metapoetics in Chekhov's "Potselui" (1887)
Борис Ланин Наследие Евгения Замятина и современная русская антиутопия
TAKAHASHI Sanami «Андрей Рублев» А. Тарковского: Интерпретация русской истории в контексте советской культуры
HONAKA Susumu Взгляд и голос: еще один опыт психоаналитического прочтения произведений А. Платонова
Martin Hošek The Hailar Incident: The Nadir of Troubled Relations between the Czechoslovak Legionnaires and the Japanese Army, April 1920

FEATURED REVIEW

- Brian Joseph Olga Mišeska Tomić, *Balkan Sprachbund Morpho-syntactic Features* (Studies in Natural Language and Linguistic Theory 67). Dordrecht: Springer, 2006, 749 + xxi pp.

BOOK REVIEWS

- Ronald Feldstein Андрей А. Зализняк, *Древнерусские энклитики*. Москва: Языки славянских культур, 2008, 280 стр.
Timothy Nunan Christopher J. Ward, *Brezhnev's Folly: The Building of BAM and Late Soviet Socialism*. University of Pittsburgh Press, 2009, 218 pp.
Włodzimierz Pianka Violetta Koseska-Toszewa, Małgorzata Korytkowska, Roman Roszko, *Polsko-bułgarska gramatyka konfrontatywna* [Polish-Bulgarian Contrastive Grammar]. Wydawnictwo Akademickie DIALOG, 2007, 530 pp.

また、第 30 号には、12 本の投稿が集まり、現在各専門家に査読を依頼しているところです。第 31 号の投稿締め切りは 2011 年 1 月 15 日です。積極的な投稿をお待ちしています。[松里]

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 122 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[望月／大須賀]

- 8 月 16 日 小椋彩（川村学園女子大）、酒井英子（石川県立看護大）
8 月 30 日 毛利公美（一橋大）
9 月 6 日 藤本尊正（大阪大）
9 月 27 日 Miroslav Dudok（ノービサード大、セルビア）、Jana Dudková（演劇・映画研究所、スロヴァキア）
9 月 29 日 カレイラ松崎順子（東京未来大）
10 月 7 日 Victor Friedman（シカゴ大、米国）
10 月 9-10 日 Aleksandr Kostanov（サハリン州文書管理局、ロシア）、Nataliia Potapova（サハリン大、ロシア）、Galina Shalkus（同）、神長英輔（日本学術振興会特別研究員）
11 月 1-2 日 Aysun Uyar（総合地球環境学研究所）、Peter Baklanov（太平洋地理学研究所、ロシア）、Ampai Harakunarak（国連環境プログラム地球環境ファシリティ）、D. Jugder（水文気象研究所、モンゴル）、D. Oyunbaatar（同）、笹志剛（北東アジア研究所、中国）張風林（経済

研究所、中国)、劉潤南(歴史研究所、中国)、阿部健一(総合地球環境学研究所)、大西健夫(岐阜大)、花松泰倫(ジョージワシントン大、米国)、林直樹(外務省欧州局ロシア課)、吉田進(環日本海経済研究所)

11月9日 Pavel Kohout(チェンパロ奏者、チェコ)

11月12日 吉岡潤(津田塾大)

◆ 研究員消息 ◆

ウルフ ディビッド研究員は8月7～14日の間、科学研究費研究に関する現地調査及び資料収集のため、ロシアに出張。また、9月20～27日の間、科学研究費研究に関する資料収集及び研究打合せのため、米国に出張。また、11月3～8日の間、科学研究費研究に関する研究発表及び打合せのため、中国に出張。

松里公孝研究員は8月15～9月13日の間、科学研究費補研究に関する現地調査及資料収集のため、ロシア、アルメニアに出張。また、11月12～16日の間、新学術領域研究に関わる国際会議にて研究報告及び政治学研究所セミナーにて研究発表、打合せのため台湾に出張。田畑伸一郎研究員は8月23～30日の間、新学術領域研究に関する研究成果発表及び報告のため、エストニアに出張。また、10月25～31日の間、環オホーツクに関する国際会議における研究成果発表及び意見交換のため、フィンランドに出張。

兔内勇津流研究員は9月1～13日の日の間、科学研究費研究のためフィンランドに出張。

宇山智彦研究員は9月6～21日の間、グローバルCOEプログラム、「バクトジャン・カタラエフ生誕150周年記念学会」にて研究報告及び打合せのため、カザフスタン、ロシアに出張。また、10月7～14日の間、日本政府派遣OSCE／ODHIR選挙監視団短期監視員として従事のため、クルグズスタンに出張。

岩下明裕研究員は9月7～16日間、新学術領域研究第1班「国際秩序の再編」に関する国際会議にて研究報告、意見交換及び研究打合せのため、セルビア、クロアチアに出張。また、9月19～28日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する会議、ワークショップ出席及び研究打合せのため、ギリシャに出張。

長縄宣博研究員は9月9～19日の間、日露学長会議出席及び科学研究費研究に関わる研究調査及び資料収集のため、ロシアに出張。

望月哲男研究員は9月13～23日の間、科学研究費研究のため、ロシアに出張。また、9月30日～10月3日の間、科学研究費研究にて研究報告及び打合せのため、韓国に出張。また、10月29日～11月1日の間、ロシア語ロシア文学国際シンポジウム2010出席のため、台湾に出張。

家田修研究員は10月12～20日の間、グローバルCOEプログラムに関わる研究のため、ハンガリーに出張。

2010年10月9日 札幌郊外ばんけい苑へ

今年の観楓会は、直接ばんけい苑に行く組と、途中でボーリング場に寄る組に別れ、昼に合流しました。



スコアが伯仲し、かつレベルの高かった、壮年組。リベンジ大会が再び開かれるという、うわさも流れました。



楽しかったね、スコアなんて二の次、という、花の女性組。



10数年ぶり2度目にセンター長となった、M氏の乾杯。哀愁と余裕がただよ、貫禄がつきましたね。



ばんけい苑の釣堀で釣りを楽しむ人たちもいました。釣った魚はうちに持って帰って食べたよ。

エッセイ 家田 修
藤森信吉

ハンガリー赤泥流出事故と日本の支援
対馬のまぜいコーヒー：国境フォーラム雑感

p. 7

p. 9

2010年11月30日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 家田修
発行者 望月哲男
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>